真田氏発祥の郷

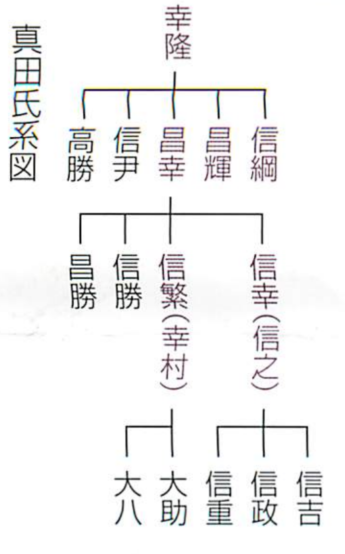
真田氏歴史館

真田幸村公肖像

真田氏三代略

片田舎の土豪に過ぎなかった真田氏は、真田幸隆が武田信玄に仕えて頭角を現し、難攻不落の砥石城を攻略。数々のめざましい戦功をたてて、東信濃と上州（今の群馬県）にまで勢力を伸ばしました。幸隆のあと信綱、昌輝兄弟が長篠の戦いで戦死。急きょ、三男の昌幸が家督を継ぎます。武田家が滅亡した後は、わずか一年の間に織田、北条、徳川、と情勢に応じ主君を変えるなど、巧みな外交戦術により領土を拡大。一方で上田城を築くなど、戦国大名としての地位を不動のものとしていきます。上州の真田領を巡って、徳川家康との間に合戦がおこった時は、わずか二千で八千の敵を打ち破り、天下にその武名を知らしめました。

豊臣秀吉亡き後、天下の覇者を決める関ヶ原の戦いでは、昌幸と次男の幸村が豊臣方に、長男の信之が徳川方に別れて戦うことになり、昌幸父子は三万八千の大軍を上田城で迎え撃ちます。敵を散々に悩ませますが、西軍敗北により、紀州（今の和歌山県）の九度山へ流されました。昌幸はその地で没しますが、幸村は、大阪城へ入城。秀吉の遺児秀頼を守り立てて、大阪夏の陣では、家康の本陣へ切り込みますが、衆寡敵せず、戦場の露と消えました。その後の真田家は信之により、家名を存続し、松代へ移封となりますが、明治まで十代に渡って続き真田十万石として栄えました。



六文銭（六連銭）

真田氏の家紋が六文銭に改められたのは、幸隆が武田方に臣従した時からと言われている。それまでは滋野氏の家紋月輪七九曜であった。六文銭は「六道銭」を表し、三途の川の渡し賃として棺に入れるもので、武士が戦いに挑んでは生きて帰れぬものという強い意志を表している。

真田昌幸

1547年～1611年

武田信玄のもとで武藤喜兵衛を名乗ったが、兄の戦死により真田家を継いだ。幼少よりその才智を認められ、信玄の小姓から足軽大将に抜擢されるなど、勇猛の士でもあった。上田城で徳川の大軍を二度に渡り撃退するも、最後を紀州に流されその地で没した。

真田幸隆

1513年～1574年

真田氏中興の祖。村上義清らに攻められ一旦は失領するものの、武田信玄に仕え、難攻不落と言われた砥石城を一夜で攻略するなど数々の軍功を挙げ、真田氏繁栄の礎を築く。

真田信之

1566年～1658年

昌幸長男。正室は、徳川四天王本多忠勝の娘、小松姫（徳川家康養女）。関ヶ原の戦いでは、東軍に属して戦った。戦後、上田・沼田に領地を安堵されるが、その後信濃松代に移封。93才で没した。

真田信綱

1537年～1575年

幸隆長男。武田二十四将の一人。駿河攻め、三増峠の戦い等で数々の武功を挙げる。父幸隆隠居後、真田家の家督を継ぐも、わずか1年後に、長篠の戦いで戦死。

真田幸村

1567年～1615年

昌幸次男。通称は左衛門佐。関ヶ原の戦いでは、父と共に西軍に属し戦ったが、敗戦により紀州に配流となった。大阪冬の陣が勃発すると、招かれ入城し、徳川方を苦しめた。夏の陣では、家康本陣まで肉迫したが、力尽き戦死。「真田、日本一の兵」と謳われた。

真田昌輝

1543年～1575年

幸隆次男。信玄の百足衆に抜擢。また、信濃先方衆として騎馬50騎を率い数々の戦功をたてた。長篠の戦いで、信綱と共に戦死。

時代を駆け抜けた、真田氏ゆかりの品々。

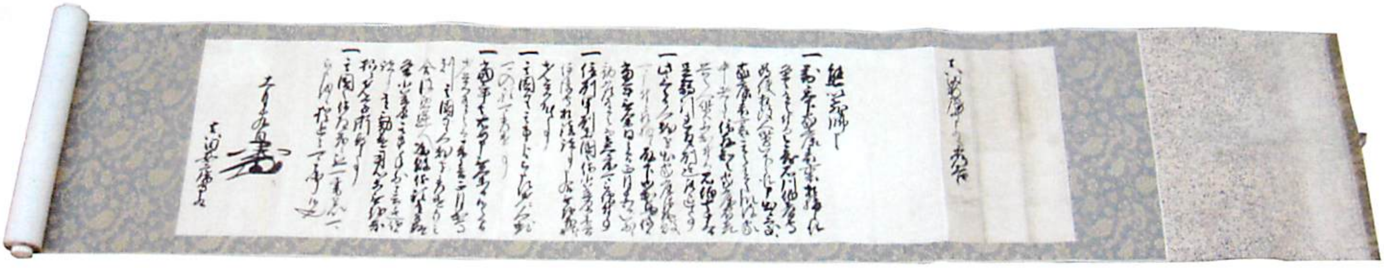
館内風景

信綱寺鬼板

真田三代記

NHK時代劇「真田太平記」で使用された真田父子の鎧

錦絵 家康大仁村難戦之図



天正13年（1585年）真田昌幸宛　豊臣秀吉書状

大阪夏の陣図屏風（複製）

周辺施設のご案内

真田氏館跡・御屋敷公園

真田氏が上田城を築城する以前に居住していた館跡を公園として整備したものです。現在は、皇大神宮が建てられており、これは真田昌幸が上田城へ移転するにあたりこの地が荒廃するのを憂い、神聖な場所として保存されるように図ったためと伝えられています。四周に土塁が廻らしてあり、南側には大手口があり、北西の隅は低地になっていて厩屋跡であったと推定されます。

ここは、つつじの名所としても知られており、5月中旬から6月上旬にかけて公園一帯が約600株のつつじの花で赤く染まります。

利用案内

◆開館時間
午前9時～午後4時

◆休館日
毎週火曜日 年末年始
（火曜日祝日の場合は翌日）

◆観覧料

一般	250（200）円
高校生以上の学生	160（120）円
小･中学生	100　（80）円

※（　　）内は20名以上の団体観覧料

真田氏歴史館

〒386-2202
長野県上田市真田町本原 2984-1
TEL.0268-72-4344